

幼児教育アドバイザーは研修会で何を指導しているのか

— インタビュアーの質問に基づく分析から —

山崎 晃¹・越中 康治²・松井 剛太³・濱田 祥子⁴・東 和子⁵

本研究の目的は幼児教育アドバイザーが研修会において、どのようなことを助言・指導しているのかを、インタビュアーの質問に基づいて、明らかにすることであった。具体的には、第1に、幼児教育アドバイザーを対象としたインタビュアーの発話の特徴を明らかにすること、第2に、インタビュアーと幼児教育アドバイザーの役割に関する重要語の変化を捉え、幼児教育アドバイザーの役割が訪問時期によって異なるかを明らかにすること、第3に、インタビュアーの質問に基づいて捉えられた特徴語の前後の発言内容を分析し、幼児教育アドバイザーは役割として何を重要なこととして捉えているかを明らかにすることであった。

研究の結果、インタビュアーの発言について、(1)特徴語として、1回目は〈幼稚園〉〈先生〉、2回目は〈幼児〉〈交流〉、3回目は〈保育園〉〈発表〉、4回目は〈幼稚園〉〈小学校〉〈思う〉、5回目は〈見る〉〈話〉〈保育〉、6回目は〈見る〉〈保育〉〈アドバイザー〉、7回目は〈先生〉〈様子〉〈思う〉、8回目は〈事例〉〈話す〉などが抽出され、訪問時期による違いがみられた。(2)重要語について χ^2 検定を行った結果、〈幼児教育アドバイザー〉〈交流〉〈幼児〉〈先生〉〈幼稚園〉〈保育園〉〈事例〉〈連携〉〈見る〉が有意であり、時期による出現頻度が異なっていることが明らかになった。(3)訪問回数より、幼児教育アドバイザーの幼稚園や保育者に関する指導・助言などの発言が、個別のことから全体的・俯瞰的なことへと変化することが明らかになった。

キーワード：幼児教育アドバイザー、保育、役割、園内研究、合同研修会

生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児期の教育は重要なものであり、質の高い幼児教育の提供が期待されている（文部科学省、2011）。それを実現するために、幼稚園、保育所、認定こども園等の幼児教育施設の教職員に対する研修体制をはじめ、地方公共団体における幼児教

育の推進体制が構築されている。そのひとつとして、「幼児教育アドバイザー」の育成・配置がある（文部科学省、2018；2021）。幼児教育アドバイザー制度については、様々な議論を経て導入された経緯がある（阿部；2017）。幼児教育アドバイザー制度は、幼児教育センターの設立やその役割の明確化やセンターを中心としたネットワーク構築と緊密に関係すると認識されている。

また、幼児教育アドバイザーに関して、地方公共団体や幼児教育の現場へと展開される際の

所属

- | | |
|-------------|----------|
| 1：広島文化学園大学 | 2：宮城教育大学 |
| 3：香川大学 | 4：比治山大学 |
| 5：元広島市教育委員会 | |



課題と可能性に関する研究（高島、2018）、幼児教育アドバイザーの配置により、気になる子への支援等について担当課間の情報共有や連携がしやすくなり、幼稚園を小学校の視点から、的確に指導してくれるという研究や、幼児教育アドバイザーが参加する園内研修などに参加できない保育者の資質向上、園内研修機会の確保不足や勤務形態・雇用形態の差異、施設間の横のつながりが少ないこと等の課題があるとする研究もある（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター、2017）。さらに、(1)全般的に施設の職員には研修の時間が限られており、出席できる職員は正規の職員などに限られてしまうこと、(2)私立幼稚園には、建園の精神があり、こちらのメッセージを受け止めてくれない傾向があること、(3)施設間の横のつながりが少ないことの課題もあるという（阿部、2017）。

幼児教育アドバイザーにどのような人材を配置するかについての研究（保育教諭養成課程研究会、2018）、幼児教育アドバイザーの導入の背景や訪問事業の効果についての研究（清水・濱田・上山・杉村、2021；上山・杉村・清水・濱田、2021；田島・中坪、2021）などがある。しかし、幼児教育アドバイザーに関する先行研究において、実際にどのようなアドバイスや指導の変化がみられるかについての研究はほとんど見当たらない。管見の限り、山崎・越中・松井・濱田・東（2021；2022）の研究のみである。この研究では、8回の訪問を4期に分けて、時期によりアドバイスの内容が変化することを明らかにしている。すなわち、第1期は子どもの発達の状況、園や保育者・保育の課題、第2期は幼稚園、保育所と小学校の組織やシステムの違いの認識及び幼児への指導・援助・保育、第3期は幼小の指導の違い、その基礎となる幼児の発達発達の理解、保育者の省察、第4期は保

育者自身の認識や行動を変えようとする心構えが強調されていることが示された。幼児教育アドバイザーの派遣園での指導・助言のプロセスは、アドバイザーによる違いは少なく、普遍的なものであるという（山崎ら、2022）。

近年、一前・秋田・天野（2022）による保幼小連携接続における幼児教育アドバイザーと校長・園長の認識と実態に関する研究、堀越・松寄（2022）による、幼児教育と幼小接続の観点からみた幼児教育センターの役割とネットワーク構築に関する研究も始められている。いずれの研究も就学前施設と小学校の連携・接続に関することである。研究成果は蓄積されてきているが、幼児教育アドバイザーが研修会に参加することによる幼稚園側の認識や保育者の子どもへの対応の変化や改善、保育内容・方法の改善・発展・幼小連携推進などに果たす効果については、十分に明らかになったとはいえない。本研究は、幼児教育アドバイザーの資質の向上や幼児教育センターでの役割を明確にすることにもつながるものである。

幼児教育アドバイザーのアドバイスや助言の変化・特徴を経時的に捉えることは、自治体や幼稚園などの現場に丸投げされていた幼児教育アドバイザーの役割を明確にし、どの様なアドバイスがどの様な効果を持つのかを明らかにすることにもつながり、幼児教育アドバイザーの研修に役立てることもできる。

幼児教育アドバイザーの資質向上や幼児教育アドバイザーを受け入れた幼稚園の活動を、私立幼稚園や非正規職員に広げていくために、何が必要かを明らかにするための基礎として本研究を位置づける。本研究の成果は、今後も幼小連携や幼児教育アドバイザーの資質向上を推進するための基礎資料となる。

本研究では、インタビューの発言の特徴を捉え、その分析結果と先行研究で重要と見なさ



れた用語に基づいて研修に関するインタビューと幼児教育アドバイザーとの具体的なやりとりを抽出し、幼児教育アドバイザーに関する課題について提言することを目的とした。

具体的な目的は以下の通りである。第1に、幼児教育アドバイザーを対象としたインタビューの発話の特徴を捉えること、第2に、インタビューと幼児教育アドバイザーの役割に関する重要語の変化を捉え、幼児教育アドバイザーの役割が訪問時期によって異なるかを明らかにすること、第3に、特徴語の前後の発言内容の分析から、幼児教育アドバイザーは役割として何を重要であると捉えているかを明らかにすることであった。

方法

1. インタビュー対象者とインタビュー

幼児教育アドバイザーは公立幼稚園の園長経験者1名であり、インタビューはH市教育委員会の指導主事経験者で、推進の中心者の一

人であった。

本研究では、インタビューによる半構造化された質問と、それに対する幼児教育アドバイザーが答える形式で行われた。

2. インタビュー場所と時期

インタビューは広島市役所内で実施した。インタビュー日は、201X年、1回目(5月9日)、2回目(6月20日)、3回目(7月11日)、4回目(8月18日)、5回目(9月12日)、6回目(10月16日)、7回目(11月14日)、8回目(12月16日)であった。いずれも幼児教育アドバイザーが幼稚園を訪問した直後に行った。

インタビュー内容を録音し、文字起こしして分析した。

3. インタビュー内容と分析

インタビュー内容の大枠として、(1)園の実態・幼児の実態・雰囲気的印象、(2)園内研修の実際、(3)園運営、(4)幼児教育アドバイザーの園

表1 訪問時と特徴語として挙げられた語(上位5番目まで)

	アドバイザー	幼児	先生	幼稚園	保育園
1回目	8(14.8)	10(18.5)	▲16(29.6)	▲16(29.6)	0(0.0)
2回目	9(17.0)	▲15(28.3)	6(11.3)	6(11.3)	3(5.7)
3回目	6(12.2)	7(14.3)	6(12.24)	8(16.3)	▲7(14.3)
4回目	13(11.9)	13(11.9)	▽8(7.3)	19(17.4)	5(4.3)
8回目	4(4.8)	▽7(8.3)	11(13.1)	▽5(6.0)	1(1.2)
合計	75	100	87	77	31
χ^2	13.22	17.651 *	21.290 **	26.127 **	19.336 **
p値	0.067	0.014	0.003	0.000	0.007
	*事例	*連携	*みる	*小学校	
1回目	3(5.6)	4(7.4)	2(3.7)	1(1.9)	
2回目	2(3.8)	1(1.9)	1(1.9)	2(3.8)	
3回目	5(10.2)	5(10.2)	1(2.0)	2(4.1)	
4回目	2(1.8)	7(6.4)	▽2(1.8)	11(10.)	
5回目	1(1.1)	▽0(0.0)	▲11(12.5)	1(1.1)	
合計	32	30	41	30	
χ^2	45.131 **	0.888 **	39.209 **	12.536	
p値	0.000	0.004	0.000	0.084	



や保育者の役割、(5)第三者による事例・指導等に関する見方、(6)具体的な指導内容、(7)事例研究の進め方、(8)事例の捉え方、見取りの視点、に係る内容の質問に対して回答を求めた。

KH Coder (3b04a) によるテキストマイニング (樋口、2020) を行った。

結果と考察

1. 訪問時期による特徴語

時期別の特徴語を表1に示した。1回目の訪問時の特徴語は、〈幼稚園〉〈今後〉〈先生〉であった。幼児教育アドバイザーが初回訪問時に感じた園の実態・印象、協議の内容、アドバイス内容、園の先生の研修や幼児教育アドバイザーの訪問に対する姿勢などであった。2回目の訪問時の特徴語は、〈幼児〉〈ペア〉〈交流〉であり、幼小で交流をした際の幼児の姿についての発表内容や発表した先生の姿が示されている。3回目の訪問時の特徴語は、〈保育園〉〈発表〉〈具体〉であった。8月1日の研究会においては「幼児教育から小学校教育へ～効果的な連携のあり方について」の発表内容に関わる記述と、保育園や小学校との連携や取組に関することであった。第4回目の訪問時の特徴語は、〈幼稚園〉〈小学校〉〈教育〉であり、幼小連携に関連した語であった。5回目の訪問時の特徴語は、〈見る〉〈話〉〈保育〉であった。保育を見ること、幼児

教育アドバイザーの話の内容であった。第6回目の訪問時の特徴語は、〈見る〉〈保育〉〈アドバイザー〉であった。実際に保育を見ることによって、幼児の表情とか言動、先生の関わりについて、具体的な場面に沿ったアドバイスの姿が述べられていた。第7回目の訪問時の特徴語は、〈先生〉〈様子〉であり、先生(保育者)が子どもに寄り添い、認め、共感することの重要性が語られていることに関する内容であった。8回目の訪問時の特徴語は、〈事例〉〈話し合う〉であり、園内研修会での具体的事例を挙げての話し合いにおける保育者の成長や保幼小連携の在り方についての確認と今後の方向性などに関連する語であった。なお、〈アドバイザー〉は、1回目から3回目まで連続しており、幼児教育アドバイザーの対応を確認しようとするインタビューの姿勢が示されている。

このように、①子どもの発達の状況や研修、②保育園、幼稚園、小学校の教育・保育、③園内研究と幼児の行動を捉えること、④保護者、事例を通した具体的な話し合いの内容に関することなどに経時的変化がみられ、先行研究(山崎ら; 2021、2022)と一致する結果であった。

2. 重要語の訪問回数による違い

重要語としての〈アドバイザー〉〈交流〉〈幼児〉〈先生〉〈幼稚園〉〈保育園〉〈事例〉〈連携〉〈見る〉

表2 重要語と訪問時期の χ^2 検定と残差分析結果

	幼児	先生	幼稚園	保育園	事例	連携	見る	小学校	研修	アドバイザー	N
1回目	10(18.52)	▲16(29.63)	▲16(29.63)	▽0(0.00)	3(5.56)	▲6(11.11)	2(3.70)	1(1.85)	7(12.96)	8(14.81)	54
2回目	▲15(28.30)	6(11.32)	6(11.32)	3(5.66)	2(3.77)	1(1.89)	1(1.89)	2(3.77)	▲8(15.09)	9(16.98)	53
3回目	7(14.29)	6(12.24)	8(16.33)	▲7(14.29)	5(10.20)	▲6(12.24)	1(2.04)	2(4.08)	5(10.20)	6(12.24)	49
4回目	13(11.93)	▽8(7.34)	▲19(17.43)	5(4.59)	▽2(1.83)	7(6.42)	▽2(1.83)	▲11(10.09)	7(6.42)	13(11.93)	109
5回目	16(18.18)	▽7(7.95)	▽5(5.68)	▲8(9.09)	▽1(1.14)	▽1(1.14)	▲11(12.50)	▽1(1.14)	9(10.23)	12(13.64)	88
6回目	▲20(25.64)	15(19.23)	10(12.82)	5(6.41)	2(2.56)	4(5.13)	▲16(20.51)	4(5.13)	8(10.26)	▲16(20.51)	78
7回目	12(12.37)	18(18.56)	8(8.25)	2(2.06)	▽1(1.03)	▽0(0.00)	3(3.09)	7(7.22)	▽1(1.03)	7(7.22)	97
8回目	▽7(8.33)	11(13.10)	▽5(5.95)	▽1(1.19)	▲16(19.05)	▲9(10.71)	5(5.95)	2(2.38)	5(5.95)	▽4(4.76)	84
合計	100	87	77	31	32	34	41	30	50	75	612
χ^2 値	17.651 *	21.290 **	26.127 **	19.336 **	45.131 **	22.140 **	39.209 **	12.536 †	13.844 †	13.220 †	

(** p<0.01; * p<0.05; † p<0.10)



〈小学校〉について訪問時期をもとに χ^2 検定を行った(表2)。その結果、何れの語も有意または有意傾向がみられ、訪問時期によって出現頻度に違いがあることが示されている。

有意または有意傾向がみられたので、残差分析を行った結果(表2)、〈幼児〉は2回目と6回目>8回目であり、〈先生〉は1回目>4回目と5回目、〈幼稚園〉は1回目と4回目>5回目と8回目、〈保育園〉は3回目と5回目>1回目と8回目、〈事例〉は8回目>4回目と5回目であった。〈連携〉は1回目、3回目、8回目>5回目、7回目、〈見る〉は5回目、6回目>4回目、〈小学校〉は4回目>5回目、〈研修〉は2回目>7回目、〈アドバイザー〉は6回目>8回目であった。1回目や2回目のインタビューの質問は、訪問した幼稚園に関する情報収集や幼児の捉え方や研修の受け止め方などが多かった。その後、3回目、4回目、5回目には、保育園、連携に代表されるような研修会、合同研修会、そこに参加する異校種の先生と一緒に保育を参観する(見る)ことの重要性に関する質問もあった。6回目には、幼児、見る、幼児教育アドバイザーの役割に関する質問が続き、最後に事例に基づいた「幼保小連携」に関する質問が多くなっていた。

このようにインタビューの質問内容が訪問時期によって異なり、また、残差分析の結果に示されているように異なる訪問時期に同じ重要語が出現している。これらのことから、インタビューが幼児教育アドバイザーの訪問時期の指導・助言、心構えを意識し、その時期に重要なポイントを指導していると捉えられる。

幼児教育アドバイザーの資質を高め、研修会の質を充実させるためには、幼児教育アドバイザーのスーパーバイズや研修を重ねることが必須である。インタビューがインタビューを通して幼児教育アドバイザーに対するスーパーバ

イザーの役割を果たしているともいえる。

すなわち、インタビュアーは、長年、園長や教育委員会において現場の指導に関わっており、幼児教育、幼稚園教育に造詣が深く、長期的視点から幼児教育を考えることの必要性を認識している。インタビュアーは幼児教育アドバイザーの資質を高め、保育現場の課題解決に資するように熟慮しながらインタビューをしている。インタビュアーは、時に幼児教育アドバイザーの悩みの解決や訪問園の状況の解釈などに関して、アドバイスを行っていることもあり、いわば臨床で言うスーパーバイザーの役割を果たしている側面もある。その意味から、本研究は文部科学省(2022)がいう持続可能な幼児教育アドバイザー育成のための体制構築を考える際に、幼児教育アドバイザーの研修とも関連し、スーパーバイズをする体制やスーパーバイザーの役割を考えていくことの必要性を示唆している。

3. 訪問時期毎のエピソードから

8回の訪問の特徴語としてあげられた語のうち1番目の語を起点に、その前後のインタビューと幼児教育アドバイザーとのやりとりを捉え、そこで語られている内容について明らかにする。

以下の事例ではインタビュアーを“In”、幼児教育アドバイザーを“Ad”と記した。また、下線部分はポイントとなる箇所であり、()内は文の意味や文脈が損なわれない範囲で著者が補足した。

なお、インタビューの記述語のイタリック体で示したものは、基本的にインタビュアーの発話意図や意味づけなどを記したものである。

1回目 訪問先の幼稚園の様子

In: 4歳児や5歳児の実態の話から、今後の



指導について話したということですね。

Ad: 幼小連携についての研修・研究を通して、これまでは5歳児だけ行えば良いと思っていたが、4歳児に体験した事が5歳児にどう生かせるかが大切だと思うといわれました。幼稚園の先生方の考えが一つの方向に一致していて、前向きで、真面目で、熱心に取り組んでいるという印象を受けました。

インタビューはこれまでの幼稚園の研修内容を確認することによって、幼児教育アドバイザーが自身の役割を再確認できるように質問している。

In: 初回の訪問では、まず幼稚園の先生が実態を話され、それに基づいて今後の研修をどのように進めていくかの土台作りをしたという事ですね。

Ad: そうですね。加えて園長は、私立の幼稚園・保育園、公立や私立の小学校との連携を推進していきたいとの思いがあるので、一緒に考えていくことにしました。

幼児教育アドバイザーの初回の訪問であることから、インタビューは、幼稚園の実態・保育者の対応、研修計画などについて確認し、それを次回以降の訪問・研修に生かすことを意識させるための発言を行っていた。

2回目 幼稚園の課題

In: 幼稚園は幼児教育アドバイザーに来てもらうことを前提に、年間の研修を組んでいるということですね。課題としては何がありますか。

Ad: 課題の一つ目は、研修・研究に関してです。研究や研修はすでに進んでいます。新任の先生と2年間経験のある先生では、理解度などに違いがあるかも知れないので、研修の基本を確認することが大切だと思いました。

二つ目は、帰りの際に、明日の登園を楽しみにするような手立てがあると良いと思いました。例えば、明日はこの遊びをしますなど、明日への見通しをもたせるような言葉掛けがあったら、幼児が目的を持ち、期待して幼稚園にくることにつながると思いました。

インタビューによる幼稚園における「課題」についての問いかけに、幼児教育アドバイザーは研修体制や実際の保育を見て感じた課題を述べていた。継続的研究において生じやすい経験者と未経験者の理解度の違いを予想し、その違いを埋めるための配慮を考えている幼児教育アドバイザーの姿勢がみて取れる。

次回以降の幼児教育アドバイザーの幼稚園における指導・助言にもつながっていくインタビューの質問である。

3回目 幼保小連携と接続カリキュラム、地域連携

In: 合同研修会での発表の内容をかいつまんでお話しください。

Ad: 子どもを繋ぐ、組織を繋ぐ、カリキュラムを繋ぐ、を研究の内容としていたようです。2年間の取組から、繋ぐポイントは、幼稚園と保育園と小学校の違いを知る、話し合いの時間を工夫する、交流の検討と反省会は、幼稚園と保育園と小学校の先生と保育士が共に検証を行うことであると説明されていました。

In: 「子どもを繋ぐ」とは何を指しているのですか。

Ad: 「子どもを繋ぐ」とは、5歳児と1年生との交流に関して、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムについて実践と研究を行っていくことや、前回行った交流の反省を生かしながら、子どもの実態に合わせた内容に改善するということでした。



「組織を繋ぐ」とは公私立の幼稚園や保育園が合同保育や合同授業の公開を通して連携を考える機会をもつこと、幼稚園と一年生の交流に公立・私立の保育園を巻き込み地域の繋がりを深めていくことでした。しかし、参加園の関与に濃淡があることが大きな課題です。

In：一緒にやっていきたいにもかかわらず、入れない幼稚園・保育園もあるということですね。

Ad：そうです。そこをどう繋ぐかというのも一つ大きな課題です。

合同研修会での「繋ぐ」の内容を確認し、地域の公私立の幼稚園・保育園・小学校の繋がることの難しさを確認し、幼児教育アドバイザーの役割を考えていくことの必要性・課題を示唆するインタビューである。

また、インタビューは、幼稚園や小学校と同じ校区にある保育園の中には研修会に参加することが難しい園があることに関する指摘を行い、地域で保育と教育を繋ぐための課題を確認している。

4回目 就学前施設と小学校との違いの理解と連携のポイント

In：OH 幼稚園の実践報告の中に幼稚園・保育園と小学校の違いについて、具体的な例が出てきていましたか。

Ad：授業と保育の違いが出ていました。「(活動時間の)区切りやグループを作ることにしても違いがあります。」と。幼保小連携のポイントとして力説されたところは、幼稚園・保育園・小学校の校種を超えて一緒に考えたり、準備したり、互いの違いを知り、尊重し合うことから始め、また、話し合いの時間を工夫することも大切とのことでした。

幼稚園・保育園等と小学校の違いについて、再確認し、幼小連携のポイントは何か

を引き出すためのインタビューである。幼稚園・保育所と小学校が一緒に、何が違うのかを理解し、それぞれを尊重することの大切さを学んでいることが推察される。同時に話し合いのための時間設定は大きな課題であることを導いたインタビューであった。

In：合同研修会には、どのような良さや課題があると思われますか。

Ad：共通の場で、一つの課題について考えることはとても良いことだと思います。例えば、幼児の発達や学びの連続性を考えることは非常に重要なことだと思います。

In：(課題についての質問) 今どこの教育機関でも保育園でも同じだと思うのですが、そのような中で接点をもっていくためには、(連携を)意識することとか、みんなで同じ思いになるということは大切だと思います。課題は、保育園では休憩時間以外に、設定が難しいことですか。

Ad：そうです。子どもが昼寝している時間に研修会をしていても、4時になると帰られます。

地域の幼稚園と小学校・保育園を含めた連携のための合同研修会を開き、立場の違い保幼小の先生の話し合いや情報交換は、幼児・児童の発達や学びを保証するために、また、それぞれの機関の果たす役割を再確認するために重要であることを示すインタビューである。さらに、勤務時間が異なる保育園の先生方の参加が難しいこともあるが、短時間の参加であっても合同研修は、連携の第一歩として重要であることを示している。

5回目 保育や施設を見る、連携を継続する

In：この幼稚園について、幼児教育アドバイザーが課題と感じたことはどんなことですか。



Ad：保育をみて、(課題として) 体力面での指導と工夫が必要だと思いました。(幼稚園の)中にいると気付かないこともあるので、気付いたことを伝えていくようにしています。遊具が4、5歳児には物足りないと思いました。先生方は研究や研修に深く関わると同時に、総合的に見るということが必要だと思います。

研修会でのやり取りだけでは分からなかったことが、幼児教育アドバイザーが保育場面を実際に見ることによって、その園の課題が分かるようになり、先生方に保育や施設・設備を俯瞰的・総合的に捉えることの重要性を意識させることにつながるインタビューであった。

In：報告書の中に、園長が「自分たちが保育をしていて、これはどうなのかなと思ながらやっているところに来ていただけることに感謝しています。」と書いてありました。立場の違う方が入ることに、意味があると思います。幼児教育アドバイザーが園に行くことによって、次の活動につながってきていて、(訪問の) 意味が回数を重ねるたびに出てきているように思います。

Ad：続けていくことによって、いろいろなことを話し合える雰囲気も出て、気持ちも楽になり、率直に言葉掛けもできるようになっています。

幼児教育アドバイザーが継続して園を訪問し指導することによって、訪問を受ける側も訪問する側にも大きな意識・心情の変化が生まれてきていることが分かるエピソードである。幼児教育アドバイザーのアドバイスについてのポジティブな園の受け止めから、この制度のメリットが明確になったインタビューであった。

6回目見る アドバイザー

In：4歳児と5歳児の保育をみて、子どもの育ちについて感じたことがありますか。

Ad：4歳児は安心感をもって生活できていると思います。

5歳児には支援を必要とするR君がいます。保育者は振り回されているという感じがしましたが、他の幼児は非常に落ち着いていますし、先生はしっかり幼児のことを把握しているようです。先生方は、R君を他の幼児と同じように生活させたいと思いつながら、危なくないように活動を制限することもあり、気にしておられるようです。

4歳児クラスと5歳児クラスの保育や、幼児の姿を見て感じた保育者の幼児への働きかけ・子どもへの対応、支援の必要な子への対応などについての対応すべき課題・状況が語られているエピソードである。

In：開始から半年経っている幼保小連携についての取り組み状況は、どうですか。

Ad：それについては、要領良く、落ち着いてゆとりを持って進めていました。今年度からは、これまで参加していなかった他の幼稚園・保育園とも連携を開始したので、連絡協議の時間調整に苦労しているようです。

インタビューアの発言は、幼小連携を進めていくことの大切さ、研修会を開くことの難しさを考えながら指導することの必要性を示唆するものであった。新しく参加した園を含めた連絡・調整の課題を明らかにしたインタビューである。

In：「幼稚園の先生からこの事業に関してお願いしたいことがある」ということでしたが。

Ad：「(幼児教育アドバイザーに) 来園していただくことに感謝しかありません。できる限り



幼児のいる時間に訪問していただいて、活動の様子や園の先生の様子をみて、それに基づいて、アドバイスしていただきたい。」とのことでした。

訪問を受けた園が幼児教育アドバイザー訪問をポジティブに捉え、保育や幼児をみてそれに即してアドバイスを求めていることが分かる。

In : 私立園に「連携」に入ってもらうことは大切なことだと思いますが、どう考えですか。

Ad : この地域の幼稚園は連携を継続していますから、入ることへの緊張はだんだんなくなっています。若い先生や発言しなかった先生も、発言するようになってきました。

In : 先生に、聞いてもらうことで安心する様子が分かりました。配慮を要する子どもについて一緒に考え、共感することが、とても大切なことだとお聞きしました。

私立園を含めた研修会への継続的な参加が、先生方にどの様な変化をもたらしたかが明らかにされたインタビューである。ひとつの話題に異なる組織の保育者や教員が共に参加し、考えることの重要性、さらにそこに幼児教育アドバイザーが加わった指導・助言・共感が動機づけを高め、自信を持った保育活動の支えになっていることがうかがえる。幼児教育アドバイザーに訪問の意味を再確認させることにつながるインタビューである。

7回目 園内研修の特徴

7回目の特徴は、〈事例〉〈連携〉〈研修〉の頻度が他の訪問に比べて有意に低いことである(表2)。一方、〈先生〉の頻度は有意ではないが高い。ここでは、〈先生〉と、頻度は低いが〈研修〉についてのエピソードを取り上げる。

In : 合同研修会から園内研修に切り換えたことは、園内の先生方だけで話し合え、良い機会になったと思います。

Ad : 4歳児の1人が「こんなのができるよ」というと、「私もできるよ」と答えている姿を、保育者は「今はできなくても、できるように頑張る意識を持つようになっていいる」と子どもたちの成長を実感している、という話がありました。

In : 研修回数も増え、また、今回の研修は園内の先生だけですから、思いを言い合える場になったということですね。

Ad : 合同研修会も有効なのですが、幼児教育アドバイザーと園内の先生だけの園内研修をすることによって、自分たちの今の課題や疑問などについてじっくりと研修を深めることが必要だと思います。

研修の形態が保育者の発言に影響することを示したエピソードである。幼児教育アドバイザーが参加した園内研修会では、保育者が子どもの成長・発達を捉え、保育実践に基づいて発言している。幼児教育アドバイザーのアドバイスにより、新たな視点や考え方、捉え方を知る良い機会になっている。保育者の成長に関わる幼児教育アドバイザーの役割は大きいことを示すエピソードである。

In : 園内研修で、この時期の子ども達の様子を話し合えたので、意義があったと思います。

Ad : R君に関して、担任は「私が父親的な役割で、加配の先生がR君の側にいて甘えられる母親的役割で、日々接している。」と言われました。そのような保育で良いのか自信がなさそうでした。私(Ad)は「それで良いと思います。」と言いました。先生方から「ああ、良かった」という声があがりました。



In：担任は、幼児教育アドバイザーにほめられたのが嬉しかったのですね。幼児教育アドバイザーが何回か訪問し、園の実態も分かるようになって、理解も深まってきているようですね。

インタビューア－は、特別な配慮を必要とする子どもに対する幼稚園での支援について、第三者が承認し、褒めることが保育者の成長や継続につながることを引き出し、継続的な訪問の意義を再確認するようにインタビューしている。

8回目 保育者の成長と今後の課題

In：事例研修においては、具体的にどのような内容が出てきたのですか。

Ad：1年目の4歳児担任N先生の報告です。『外遊びをするために、K君も他の幼児と一緒に園庭に出たのですが、「だるまさん転んだ」には入らず、一人離れた砂場や鉄棒で遊んでいましたが、私の側に来て、「僕もやりたい。鬼をやりたい。」と言ってきました。それを聞いていたH君が「K君はね、さっきまで泣いていて初めてだるまさん転んだに来たから、K君が鬼をやって良いよ。」と言いました。H君も鬼をやりたいかったのにK君のことを気遣い、気持ちを汲み取って、それを行動として示すことができる子どもに育ってくれてとても嬉しかったです。』と具体的に話されました。

In：N先生の話しはどういう感じですか。

Ad：これまででは漠然としたテーマで話すことが多かったのですが、自分の実践を生き生きと自信をもって話されました。

In：初めの頃と比べて先生方が変わってきたということですか。

Ad：以前は、先生に順に尋ねていたのですが、今回は事例を中心にとということもあってか、若い先生も、この時はこうだったと活発に議論に参加していました。事例の捉え方が良くなって

きたと感じました。

In：具体的な事例をもとに園内の先生方ですっかり協議することが大切だということですね。

Ad：そうすれば、先生方の指導力の向上につながると実感しました。

インタビューア－の事例研修に関する様子についての問いかけによって、実践事例として具体的な子どもの様子について子どもの言動の把握、行動の読み取りなど、保育者の成長を感じさせる内容が明らかにされた。発表者に対する幼児教育アドバイザーの賞賛が保育者の成長を促すというエピソードであった。園内研修を積み重ねることによって、保育者がどのような点で進歩してきたかの具体を問おうとするインタビューア－の意図が示されているようである。

In：全体的に幼児教育アドバイザーがまとめて話した内容の紹介をしてください。

Ad：幼保小連携についてと今後の幼児教育の方向性について、話しました。幼稚園・保育園で大切にしてきたこと、これから大切にしていきたいことなどです。(中略) 幼児は遊びの中で学んでいくことを、保護者が理解し納得するようにするにはどうしたら良いか、どんな方法が考えられるかについて話し合いました。

保護者アンケートや事例についての議論などを踏まえ、幼小連携や幼児教育の方向性を踏まえた幼稚園での保育などへの対応、保護者の理解を得ることなど、今後の方向性についての議論や保育者の具体的成長の姿を引き出すインタビューであった。

まとめ

本研究の目的は、幼児教育アドバイザーを対象としたインタビューア－の発話に関して、その



訪問時期による特徴を明らかにすること、インタビューと幼児教育アドバイザーの役割に関する重要語の変化をベースにして、幼児教育アドバイザーの役割が訪問時期によって異なるかを明らかにすることであった。また、特徴語の前後のインタビュー記録・事例から、幼児教育アドバイザーは、どのような役割を重要だと捉えているかを明らかにすることであった。

本研究の結果は、阿部（2017）の指摘した施設の職員には研修の時間が限られており、協議の途中でも帰園せざるを得ない状況が見られたとする研究を支持するものであった。さらに、本研究では、地域の学区にある小学校と公立幼稚園の研修会に、公立と私立の保育園が参加を継続することにより、相互理解が深まり、同時に保育者の保育や子どもの発達のとらえ方の進歩が見られるなどの成果が認められるようになり、所属機関を超えた繋がりもみられることが明らかになった。

また、異校種間の合同研修会への参加や、園内研修会への参加、さらにそこに幼児教育アドバイザーが加わることにより、園内の職員・保育者だけでは気づかないことへの新たな気づき、視点での見方や指導の方向性を見出すことができるようになることが明らかになった。

先行研究によれば、異校種の交流や研修会に参加することにより担当課間の情報共有や連携しやすくなる（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター、2017）ことが明らかにされている。それに加えて、本研究では、支援を要する幼児への対応について、支援に対する詳しい知識の獲得、連携の仕方や保護者対応などを学ぶために、専門の施設に相談できる体制・システムなどを構築することが大切であることも明らかになった。つまり、継続して専門家に相談できる体制・システムの構築を地方自治体が図っていくことが重要であるこ

とを示した。

さらに、インタビューは幼児教育アドバイザーの幼稚園での活動内容を振り返る言葉掛けをしており、スーパーバイザーの役割を果たしていた。幼児教育アドバイザーはインタビューを受けることにより、自らの幼稚園での発言を振り返り、そこにインタビューからの示唆やヒントを見出し、自らの行動を振り返り、省察し熟考している。それはあたかも臨床家がスーパーバイズを受けているかのようなのである。そう考えると、幼児教育アドバイザーの研修体制の構築が必要であり、加えて、スーパーバイズを誰がどのように行うのか、幼児教育センターにその機能をどのように持たせるかを考える時期に来ていることを示していると思われる。

引用文献

- 阿部慶徳（2017）. 文部科学省の事業実施における広域自治体と基礎自治体 — 「幼児教育の推進体制構築事業」を事例として — 自治総研、通巻 500 号、79-99.
- 一前春子・秋田喜代美・天野美知子（2022）保幼小連携接続における幼児教育アドバイザーと校長・園長の認識と実態 (<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-22K02480/>)（2023/02/1 採録）
- 上山瑠津子・杉村伸一郎・清水寿代・濱田祥子（2021）. 幼児教育アドバイザーによる継続訪問の効果：所感の変容の分析から 幼年教育研究年報、43、25-34.
- 清水寿代・濱田祥子・上山瑠津子・杉村伸一郎（2021）. 広島県における幼児教育アドバイザー訪問事業の効果検証：3年間の縦断的検討 幼年教育研究年報、43、5-13.
- 高島裕美（2018）. 「幼児教育の推進体制構築事業」の展開に関する一考察 北海道における「幼児教育アドバイザー」事業に焦点を当



- てて 人文・自然・人間科学研究、40、147-170.
- 田島美帆・中坪史典 (2021). 幼児教育アドバイザーの継続的な訪問は保育者と幼児教育施設に何をもたらすのか 幼年教育研究年報、43、35-46.
- 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (2017). 平成28年度「幼児教育の推進体制構築事業」実施に係る調査分析事業成果報告書 (2021/01/29 採録)
- 樋口耕一 (2020). 社会調査のための計量テキスト分析 ナカニシヤ出版 京都
- 保育教諭養成課程研究会 (2018). 幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドIV http://www.youseikatei.com/pdf/20180514_2.pdf (2021/01/29 採録)
- 堀越紀香・松寄洋子 (2022) 幼児教育と幼小接続の観点からみた幼児教育センターの役割とネットワーク構築 (<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-22K02455/>) (2023/02/1 採録)
- 文部科学省 (2011). 幼稚園教育要領
- 文部科学省 (2018). 幼児教育の推進体制構築事業 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1372594.htm, 2018.6. (2021/01/29 採録)
- 文部科学省 (2021). 幼児教育推進体制の強化 https://www.mext.go.jp/content/20210210-mxt-youji-000004376_1.pdf (2023/01/29 採録)
- 文部科学省 (2022) 令和4年度「幼児教育推進体制を活用した地域の幼児教育の質向上強化事業」の公募について https://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/detail/mext_00182.html (2023/02/05 日採録)
- 山崎晃・松井剛太・越中康治・濱田祥子・東和子 (2021). 幼児教育アドバイザーの幼稚園への働きかけの変容を捉える 子ども学論集、7、15-26.
- 山崎晃・松井剛太・越中康治・濱田祥子・東和子 (2022). 幼児教育アドバイザーは幼稚園の研修にどのように関わっているか ―幼稚園への働きかけを経時的に捉える― 子ども学論集、8、1-10.

謝辞

インタビューを受け、文字起こしの草稿を確認してくださった幼児教育アドバイザーとインタビューアの先生に記して感謝します。

本研究は科学研究費補助金（代表者：山崎晃 研究課題番号：19K02604）の助成を受けた。



What are Early Childhood Education Advisors Teaching in Training Sessions?

- From an analysis based on the interviewer's questions -

Akira Yamazaki

Koji Etchu

Gota Matsui

Shoko Hamada

Kazuko Azuma

The purpose of this study is, first, to clarify the characteristics of the utterances of interviewers for early childhood education advisors. Second, based on changes in key terms regarding the roles of interviewers and early childhood education advisors, it is necessary to clarify whether the roles of early childhood education advisors differ depending on the time of visit. Third, it was necessary to analyze the content of statements before and after characteristic words and clarify what kind of role the early childhood education advisor considers important. The following were revealed: There were differences in the frequency of occurrence of characteristic words and important words depending on the time of visit. As the number of visits increased, the content of the interviewer's questions changed, revealing a change in the comments of early childhood education advisors regarding their perceptions of kindergartens and caregivers.